島木健作全集

第三巻

国書刊行会版

島木健作全集　第三巻

昭和53年5月25日　印刷
昭和53年5月30日　発行

定価3800円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著　者　島木健作
著作権者　朝倉　京
発行者　佐藤今朝夫
制作・尾沼　汎

〒170東京都豊島区巣鴨3—5—18
発行所　株式会社　国書刊行会
電話（917）8287（代表）振替・東京5—65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

第三巻　目次

時勢……一
善吉……三七
若い學者……五五
教授……一〇七
あらたま……一三七
終章……一五五
對照……一八九
ある歎願書……二〇一
三十代年一面……二二三
伸びてゆくもの……二九三
二人の母……三三七

妻の問題……三四九
日本への愛……三八五
一枚の油絵……四〇九
犬……四二五
解題……四四一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時

勢

「この粛正と取締りが峻厳であればあるだけ、われ等新人候補にとつて有利であります。（中略）この時である。新人團體が素晴しい活躍が出來るのは……第一、キャスチングボートを握ることが出來、醜悪の限りを盡せる政友、民政を敵に廻して、彼等が改心する迄、彼等が再び議會政治を毒するだけの力がなくなる迄、徹底的にやつつける事が出來る。（中略）……我々日本國民は躍進しなければならぬ。國際政局の非常時を突破するために先づ國内を一つに固めねばならぬ。政友、民政一黨一派の利權爭ひに我等の祖國日本を犠牲することは斷じて出來ぬ。祖國の前途を憂ふる者よ！　決然起つて祖國日本を守れ！……この前哨戰が今回の粛正選擧である。」

「今の世にこんな『生きた男』がうづもれてゐるかと思へば、われ等も亦世間を見直して良いのではないかとおもふ。とまれ彼は餘り大衆化しすぎてゐるから、近くの者には大して大きく見えぬが、遠くから見れば見る程、大きく見える冨士山のやうな男だ。日本の名士列傳、世界名士錄に彼は燦として光る、××の一つの誇りである。」

――無產派某候補、立候補宣言書の一節。

○

拾ひあげた紙の文字が、少し醉つてどんよりとした、見るともなしの眼に觸れた瞬間、神田政治は思はず、「ふむ」と唸るやうな聲を出してその手にぎゆつと力を入れた。――こりや、とつゞくおどろきの聲がのどのあたりでおさへられたやうであつた。そゝくさとあわてたやうな足取りで部屋にもどつて來ると、坐布團を二つならべて、今まで寢そべつてゐた、その上にどつかと大あぐらをかき、あらためて手にした紙の上をしげ〳〵と見た。もう間もなく日の落ちる時刻なのに、銘仙のどてらの黑襟も垢じみ、今起きたといつたしどけないふうである。腹や尻や股の肉が着物の下から盛り上つて、へんにふてぶてしい感じがする、その上にまた何ものかをつけ加へるやうな、はだけた胸からのぞいてゐる胸毛を、袂のなかに引つこめた左手でいぢくりながら、神田は紙の上をぢつと睨めてゐた。湯上りの、髯をあたつたあとの、糊の薄皮でも張つたやうにテカテカ光つた頰には赤味がさし、珍しいことに眼にも光りがあつた。――彼は顏をあげて、氣負つたふうにあたりを見まはした。人を求めたのである。もう夕べの臺所の仕度にかゝる頃なのであらう。奥の方でゴトゴト音がする、その方へ向つて、上づつた聲をあげ、

「おい、信子、夕刊はまだ來とりやせんのか、えゝ、おい」

と叱りつけるやうないきほひで怒鳴りつけた。え？　と答へて妻の信子が手を拭き拭き出て來て、そこらあたりを見廻すのであつたが、すでにこの號外を見た以上、それよりもおくれたニュースでしかない夕刊な

どはべつに必要とはせぬのである。彼はたゞなんとはなしにだまつては居られぬうちからの衝迫を感じたにすぎなかつた。

――またひとりになり、おちついて來ると、たつた今そこを素通りして來た町の、さういへばたしかに興奮してゐた民衆の姿が、最初に見えて來るのであつた。今日もいつものやうに、晝近くなつてやうやく寢床をはなれた。ゆふべ遲くまで麻雀にふけり。やはりそこに來てゐた、この田舍町の二流新聞記者の谷本と、歸りにそこの角の關東煮（かんとだ）きでかなり飲んだので、靑くむくんで、荒れた顏である。手のひらでなでると、毛穴から吹き出してゐるあぶらがねつとりとして、口の中は楊枝を使つたあとでも妙にねばつた。わけもなく不機嫌になり、年寄りにまでぽんぽん當り散らしながら、朝とも晝ともつかぬ食事の膳についた。七味を味噌汁のなかにやけにふり、その熬（い）りつくやうな刺戟にほつとしながら、バサバサ音をさせて、片手に新聞を披くと、大きな活字が、紙面に躍るやうである。あ、今日は開票か、と、選擧のことが、十月四日といふ日附と同時に頭に來た。勝手氣儘な豫想があれこれと紙面を賑はしてゐる、ぺつと唾でも吐きかけたいむかつく氣持でそれに眼を通してゐるうちに、昨夜の酒の席でのことが、意氣のあがつた自分の言葉の一つ一つまでが、生き生きとよみがへつて來るのであつた。――何でえ、選擧が何でえ、無產黨が何でえ、と、もういいかげんとろりとなつた眼を据えて、相手の胸倉をつかまんばかりにしてわめきだした。職掌柄、新聞記者の谷本が、話題が盡きかけるとは、今日が丁度投票日にあたる縣會議員選擧のことに持つて行かうとしたのは自然であらう。しかしそれがむしようにに神田の癇に障つた、ことに谷本が、無產者運動の歷史と現勢について一とかどの通を氣取り、生半可な知識を振りまはし、自分も昔はその道に於て何かであつたかの如くほのめかすのが片腹痛かつた。谷本はこの俺の、神田政治の過去を知らぬわけはない、過去といつてもほんの

三年前までのことだ、その俺を前においてそんな利いたふうなことがいへるなど、それがもう彼が昔何ものでもなかつた證據ではないか、――といら立つて來るともうたまらなかつた。それを口に出していはうとし危くやめた。

「××黨が何だつてんだ！　全國で十人も當選したらお目にかからあ。ふだんは何一つやらずにゐてさ、選擧だつていふと出しやばりくさる、あんなのがまだゐたかと思ふのまでもさ。それで、當選だなんて、をかしくつて！　この縣の農民代表なんてのはもとより話にならん、組織があつてもだめなのに、いはんや組織がなくて、それでどうして――」

それから候補者の品定めにはいり、なに、田中か、ふん、あれの組合運動へはいつたそもそもの最初はこの俺が手引したんさ。あ、中村か、奴は頭がわるくつてなあ、などとひとりでしやべりまくつた。つまりは、いやしくも無產黨に關する話だといふに、相手が、少しも自分の、神田政治の過去にふれて來ないのが不滿なのである。華かだつた運動の世界から退いて、この田舍町にこもつてはや三年、人は自分を忘れようとしてゐる、と、さう思ふ寂しさからも、神田は逆にわアわアと叫ぶやうな大聲を出すのであつた。だから、しばらくだまつてゐた谷本が、ふいに、そんなにみんなが揃つてだめな奴なら、おめえ、一つやつて見たらいゝぢやねえか、といひだし、え？　とおどろいて問ひ返した眼に、決して揶揄してゐるのではない、意外に眞面目な相手の顏が映つたとき、神田はたちまち生き歸つたやうに元氣づいたのである。うん、と大きくうなづき、君のやうな人は今さら僕の口からいはずとも知つてくれてゐる事とは思ふが、と前提し、彼自身の運動の過去をくどくどとくりかへしたのち、時が來りやそりや僕とて立たんことはないが、と重々しくいつた。やれ！　やれ！　その時やおれや參謀長だ、と谷本はけしかけた。うん、やるとも、と神田は昂然とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て答へ、それから二人は盃をさしつさゝれつして、つひにべろべろになつてしまつた。そして互ひに手を取り合つて、何やら意味の判然しない叫びごゑをあげ、しまひには感きはまつて泣き出し、涙か洟かわからぬもので顔を汚したのだつた。——

神田は新聞を見つゝ飯を食ひ終つてから、二階へあがつて行つた。この家で、この部屋だけが日當りのいゝ、南に向いて、大きなガラス戸のある八疊である。小春日和のなかに思ひきり手足をのばし、寢そべつて、しばしうつらうつらしてゐた。ものうくて何をする氣も起らぬ。餘程たつてから、起きて、部屋の片隅から碁盤を引つぱり出し、本を見ながらパチリパチリ石をならべはじめた。ひどく年寄りじみた感じがする。ふいに大きなくさめをし、もう日の光もうすれ、風さへ冷くなつてゐるのに氣づいて、一風呂浴びて來ようと手拭を肩に外へ出た。いゝ氣持にあつたまつてぶらぶら歸つて來ると、湯上りの駘蕩とした氣分に誘はれ、これで一杯やつたら、とまたしてもうづうづして來るのであつた。するともうたまらなかつた。無爲でゐる自墮落な生活がつゞくにつれ、身も心も彈む力を失ひ、腐蝕といふ言葉に似つかはしいものを內部に感じるのだが、それでゐて、飲み食ひにたいする慾、女にたいする慾などは、今迄になくさかんであつた。思ふに任せぬふところに自然にさへぎられるの外、抑制しようとの氣もなく、その力も失つてゐるかに見える。

——彼はそこの飲み屋にはいり、一皿の煮しめをさかなに、長く時間をかけて、二三本、のんだ。

そこを出て、爪楊枝を使ひながら、おほどかな氣持になつて、この田舍町では一番廣く賑やかな通りをあるいて行つた。ふと、道の反對の側を見ると、ある店の前で大へんな人だかりである。そこに臨時の掲示板が出來て、相撲の星取表でも見るやうになつてゐる。それを前にしてののしつてゐる人々のざわめきがこゝまで聞える。選擧のことがまたすぐ頭に來たが、そこまで行かずに道を左に曲つた。昨夜からの、そして今

朝新聞を見たときからの憤懣はまだ胸の底に苦く殘つてゐる。彼奴らこのおれを無視しやがつて！　憤りのもとはつまるところはそこにある。さういふ彼らの選擧の結果を、無視された本人がぼんやりふところ手をして立つて見てゐるざまはないだらう。それにその結果は、なにも見ずともわかつてゐるのだ。

もどつて見ると、近頃この町の某保險會社に事務員の口が見つかり、勤めるやうになつた妻の信子が一足先に歸つてゐた。いゝ氣持に一と眠りし、眼をさまして、あゝ、とのびをしたとたんに、玄關から何か放り投げて行つたものがある。立つて行つて何氣なく拾ひあげて見ると號外である。一と眼見るなり、彼の眼はその上に釘づけになつて了つた。

これはまたなんといふことだろう。紙面には縣下の縣會議員選擧の結果が大きく記されてゐる、その氏名のなかから、眞先に彼の眼にとびこんで來たのは、田中松吉に、中村善助の二人であつた。彼らは二人共に小作農である、今は組織を失つてない、以前の組合の幹部であつた、そして神田が昨夜谷本をとらへて嗤つた當の二人でもある。田中の如きは高點で次につゞくものをはるかな差異でひきはなしてゐた。

――突然、神田ははずみをつけたやうに立上ると、手早く着物を着かへた。押入れをあけたてする物音に、それと知つてはいつて來た信子が、今からどこへ？　といぶかしさうな眼をあげるのに、答へて、

「ちよつと、谷本んところへ行つて來る」

ときつぱりいつた。

「もう御飯ですよ、――すましてからにしたら」

「いいんだ」

そして彼は大きなからだを前こゞみに、そそくさともう暗くなつた街へとび出して行つた。

○

話題が、過去の無産者の運動、とくに農民の運動にとられる場合、そこに自分の名前が出て來ないと、神田は眼に見えて不滿な態度を示す。しかしそれはある程度うなづけぬ事ではないのである。

――十數年の昔、農民運動の波がはじめて各地を押し流したとき、神田政治は彼の鄕里の某縣某地方にあつて、いち早くこの新しい流れに身を投じた一人であつた。彼はその時はまだ某私立大學の學生で、丁度歸省中に、各地を遊說してこの縣に足を停めた組合運働者たちに出逢つたのである。大學では辯論部員の一人であつた神田は、もとより人道主義的興奮からであつたらう、この一行に加はり、各地を遊說してあるくうちに、かへつて自らが敎育せられる結果となり、長く求めてゐた自分の進むべき道はこゝにこそありと確信した。別れる日、彼は感激した口調で一行に向つて自分の決意を述べ、一行も亦深く喜んでこの地方の組織を彼に委ねたのであつた。彼らは神田を得たことを、今次の遊說の最も大きな收穫の一つとした、そしてそれは決していひすぎではなかつた、白色の大兵で見るからに潑剌とした精氣にあふれてゐる、辯說は爽かながら、迫つて來るやうな情熱をたゝへ、それでゐて、その人柄の何處にも、インテリらしい高慢ちきや、無用な神經質はなく、むしろ人をひきつける一種の愛敬をさへ具へてゐたのだから、農民運動者としてはこの上はのぞまれぬ資質であつたといへよう。たゞ、人を見るに烱眼なものならば、その長所にこそあるひは危險なものも亦含まれてゐはしないか、肌ざはりのいい、誰の氣も一樣にそらすまいと氣をくばる、まだ金ボタンの學生としては出來すぎたその人柄のなかにこそ、性格を根ざしてゐる御都合主義への危險が早くも讀みとられるのではないか、と氣づいたことでもあらう。しかしその時はもとよりそんな取越苦勞をするもの

はなかつた、不必要なことであつたし、また、當時は一般に、唯物史觀のはきちがへから、人間の、性格にたいする考察などは輕んぜられてゐたからである。

その學期限り神田は學校を退いて、その土地に止まり、組合の組織部員となつた。何よりも時の勢があつて、彼の活動はむだなく實を結び、後年全國でも有數な聯合會の一つとなつたこの縣の草分けとしての名と地位とを得たわけである。だから縣下の運動者の大半が、自分の手ほどきによつたと高言したとしても、敢て事實を誇張したものとはいへなかつた。だがさうだとすると、さういう自分について今更らしく說明し、人に自分の値うちをおしつけねばならぬ彼の現在の姿といふものは一體なんであるか？　自分が草分けである當のその土地で、無視される憤りを持たねばならねとは何といふことであらう。たしかに彼の上に大きな變動があつたわけだが、その間の消息を解き示す鍵として、時代の二つの頂點が、――三・一五と滿州事變とがあげられる。大正十三年から昭和二年に至る數年間は、神田個人にとつてなんと愉快な思い出にのみ滿ちてゐたことだらう。困難や危險はあつても、生活全體を破壞してしまふほどのものではなかつた、それらはむしろ適度な刺戟をあたへ、興奮劑の用を果して居つたとさへいへる。自分はほとんどその危險の矢面に立つこともなく、事件後の演說會などで、はでな一と役を買つて出ればそれですむのだ。「大統領！」そんな言葉がいつか會場の隅から發せられるやうになり、神田は苦笑した、しかしわるい氣はせず、くすぐつたいやうな嬉しさである。その頃から彼は人知れず一つの考へを、腹の底に溫めるやうになつてゐた、選ばれて議政壇上にのぼる日を夢みてゐたのである。彼とて運動の當初にはもとよりそんなことは思つても見なかつた、が、時を經、他地方の仲間の誰彼が縣會の議席を占め、社會的存在として次第に大きなものになつて行くのを見ては、ひそかに自分を顧み自分にとつてもそれは決して夢ではないとし、長年の運動の生活も結

局はそこに至つて實を結ぶわけではないか、などと考えはじめたのだつた。

この彼の考へはしかし三・一五によつて無惨に破られた。三・一五は神田の地盤であつた縣下の組織をかなりにいためたし、それよりも重大なこととして、彼は自分が名と實の伴はぬ、大衆から浮き上つた存在であつたことに、この機會にはじめて氣づかなければならなかつた。事件は彼が思ひもよらなかつた組織がこの地方にも存在してゐたことを曝露し、彼らは擧げられて行つたが、彼らの殘して行つた影響といふものは大きかつた。そしてその流れから全然除外されてゐたといふ事實、それがつまり神田が浮き上つてゐることの證左でもあつた。神田は足元が崩れて行くやうに感じ、あわてた。彼は自分がそのやうな流れに身をおくことなど、思つただけで怖氣をふるふほどであるにかゝはらず、一方自分を差おいて、そんな仕事が進められてゐたことに不快を感じた。そして意識的に彼らと對立する存在として自分を固めて行つたが、その時から彼と大衆との眞實の結びつきの機會は失はれたものと見るべきであらう。情勢は變り、今ははなやかな演說會などはなく、爭議のビラ一つさへ、どこで作られいつまかれたか明かではないことさへあつた。さうなつては神田など手を拱いてゐるのほかはない。彼は縣下の組織のうち、直接自分の息のかゝつてゐる支部のいくつかを足場にしてゐたが、そこの大衆の間からさへ、ある時、彼への非難の聲がまき起つた。發展して行く市街地の犧牲となつて、土地を明け渡さなければならぬ農民たちがあり、神田がその間に立ち、圓滿解決の衝に當つていたが、解決がついた直後に、彼は不用意にも、傍人に向つてかう囁いたといふのである。

「時々こんな事件がありやいい、すりや組合費の集りはわるくつても、まだまだ當分は喰へらあね」

賠償金の頭が、そつとはねられてゐたことが、語るに落ちて證明されたわけである。今の彼の眼には組合はもはやそんな必要物としてしか映らなかつたのであらう。

その頃全國本部の役員に欽員があり、彼はその役にあげられて鄕里を去つた。極度の人手不足に惱み、古い經驗のあるものの助力が必要だつたのである。右と左の對立がやうやくきわ立ち、組織はかつてない難局に立ち、統一が必要とされてゐたが、神田は到底その任に堪ふるものではなかつた。彼は中間派、正義派をもつて自ら任じ、統一の爲と稱して各地をあるいたりしたが、もとより何等の實績をあげることはできなかつた。彼は統一の爲の理論を全く欽いてゐる。單に古く顏が廣いといふことを唯一の賴りとしてゐるにすぎない。「俺は腹と腹で行く」と、年も漸く三十を越えて、めつきり太くなつて來た腹のあたりを叩いて大きく笑つて見せたりした。彼の中間派とはほとんど性格的なもので、左へ行くには臆病に過ぎ、右へ行くには圖太さを欽いた、右顧左眄の結果であつたにすぎぬ。さういふ彼の本質といふものは、滿州に事變が起り、急激に轉換した情勢のなかで完全に曝露された。今や全く假面をはがれ、素面で躍り出した人々のなかで神田政治はどつちかといへば鳴りを靜めてゐた。が、それまでは人並に口にしてゐたフアッショ反對をもはやいはなかつたし、時たまの演說會に出ては、「我々はもとより一概に軍事豫算に反對するものではない」とか、「我々は國防のことを重大視すればこそ、民衆の生活についていふのである」などと聲を强めていふことを忘れなかつたのを見れば、彼は彼なりにまた變りつゝあつたと見るべきであらう。——さういふ狀態が一年餘りつゞいたのちに、ある日彼は突然、プリント刷りの文書を各所に配り、それは彼の運動からの引退聲明書であつた。

聲明書の內容は模糊として曖昧なものだつた。「不肖階級運動に携つて以來すでに十有餘年、ほぼ爲すべきことも爲し終へた感がありますので、こゝしばらく故山に歸臥し、悠々自適したいと思ひます」といふやうな事であつたが、それは人を納得させる道理を欽き、何かあるな、とすぐに感じさせた。物好きがあつて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com